アン/ペア　～I Want Your Love～

ENDLICHERI

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

逢うことは許されない。

それでも、限られた時間の中で・・・・・・互いの想いを重ね・・・・・・この呪縛から抜け出そう・・・・・・。

目　次

第１節　いつだって・・・　1
第２節　コネクト　4
第３節　気づいたんだ　7
第４節　気づいてない　10
第５節　ペアになった日　13
第６節　不慣れな人付き合い　18
第７節　独り言　22
第８節　気づいたんだ　25
第９節　他人の事言えない　30
第１０節　終わるＷｅｅｋｅｎｄ　35
第１１節　そばにいて　38
第１２節　心など全焼したっていい　43

第1節　いつだって・・・

「少し、そばにいて・・・・・・。」
「・・・・・・どうぞ。」

彼女の孤独を埋めるように、僕の肩に頭を乗せる彼女をそっと抱きしめた。これが、誰からも認められなくて許されないことだって分かってる。でも、僕がそうしたいから・・・。

僕の両親は写真家だ。母は僕を授かった時に辞めてしまったけど、父は世界中を飛び回りながら世界の絶景を撮り納めていた。

でも、こんな両親には少し欠点がある。それは、芸術家あるあるだろうけど、かなりの変人だ・・・。学校に通っていた僕は両親から教え込まれてきた価値観が普通とは違うことを知り、両親の価値観をあまり信じられずにいた。

そんな両親は、ご近所関係もあまりよろしくない。と言っても、仲が悪いのは一世帯だけ。別のジャンルだけど芸術家の家だった。その家は、僕と同じ歳の子がいるらしいけど、互いの親のおかげで会って話したことはない。

最近の僕の父親は、僕に「写真家になれ」と一点張り。僕自身、写真は好きだ。でも、写真家になる気はない。今思い返せば、幼い頃からプレゼントは全部写真絡みだったな・・・・・・。父は生粋の写真バカだから嫌でも僕に「写真家になれ」と言う。母は中立の立場を取ろうとするが、どちらかと言えば父側だ。こんな両親、呆れすぎて改

善させる気にもならない。

「海斗(かいと)！何度言ったら分かるんだ!?」

「分かるわけねぇだろ！人の人生をなんだと思ってる!?」

「写真家になれば、色んな場所に行ける！上手な写真を撮れば――」

「上手くいったのはあんたの運が良かっただけだ！あんたの息子だからって上手く行くと思うか!?」

「やってみなければ分か――おい、どこに行く!?まだ話は終わってないぞ！」

「・・・・・・あんたと話したって、時間の無駄だ。」

「おい！海斗、待――」

居間にいれば必ず将来の話になる。それが嫌で、僕は自分の部屋に向かう。机と椅子、ベッドに本棚、それ以外は何もない殺風景な部屋。そんな中で存在を主張するのは机の上のパソコンとその上の段に置いてあるコピー機。両親が『好きなもの買ってあげる』って言ったから、デスクトップのパソコンとコピー機を買ってもらうことにした。

「はぁ・・・。」

「ま～た喧嘩して～？ほんと飽きないよね～？」

「・・・・・・なんで海璃(かいり)はここにいるの？」

「それは海斗が心配だからだよ！」

「だからって俺の部屋にいる理由にはならないだろ？」

「テヘッ♪」

このテンションの高い人は僕の姉。名前は『海璃』。最近好きだった人が別の人の恋人になり勝手に失恋したちょっと悲しくてちょっと痛い人。

「そうだ！明日、『Ｃｉ(サー)ＲＣＬＥ(クル)』でライブあるんだ！来る？」

「それって、海璃が通ってるライブハウスだよね？・・・・・・出るの

?」
「出ない出ない！『蒼空（そら）』の状態がアレだから、あんまり出れないよ・・・・・・。」
「・・・・・・へぇ。」

『蒼空』って人が、海璃の初めて恋して初めて失恋した人。まだ仲良くはしているようだけど、当人のいない時にその名前を出すと悲しそうな顔をする。

「・・・・・・気が向いたら行くよ。」
「やっぱり断るよ――って、来てくれるの!?」
「その代わり、海璃とは行かないから。」
「はいはい。じゃ、また後でね～。」

僕は海璃からライブのチケットを貰い、海璃は嬉しそうに部屋から出ていった。
それから椅子に座り、何もせずにボーッと部屋にいると、意識はなくなっていた・・・。

第2節　コネクト

「・・・・・・うっ、ん・・・・・・・うん・・・・？」

　眩しい。それが意識が起きた時に思ったことだった。目はまだ重たくて開けることはできない。でも、眩しいと感じさせる理由はなんとなく分かった。まず、体は机に伏せた状態ということ。その証拠に体のあちこちが痛い。次に、眩しい理由は窓から射してくる日差しだ。机の電気を着けた記憶はないし、カーテンを閉めた記憶もない。

「・・・・・・やべ、寝てた・・・・。」

　机の上のパソコンを起動すれば、ネット小説の執筆ページが表示される。昨日の意識を失うまでの事をかなり思い出してきた。あの後パソコンを起こし、ネット小説を執筆していた。

　誰でも小説を書けるサイトを使って僕は小説家として密かに活動している。読者はいても2人か3人。たまに作品によるけど他の人にも人気の作品を書いたことがある。なんで人気になったのかは分からない。

　そんな事は置いといて、僕は体を動かしてまずは風呂場に向かう。高校入ったらしょっちゅうこんな事してるから朝風呂（シャワーのみ）は慣れた。今日は休みだから慌ててシャワーを済ませる必要もない。

　シャワーを浴び終えたら、再び自分の部屋に戻ってきた。小説のデータが飛ぶ前に保存をして、散歩に出かける準備をする。身支度を終えると、居間に行き、朝食を取る。両親は朝から仕事で出掛けているから、昨日の延長戦が起きることはない。

「ふぁあ～・・・・・・あれ？今からご飯？」
「そういう海璃は今起きたの？」
「あはは～。昨日徹夜しちゃってね～。」
「へー。」

大して興味のないことだったから、さっさと朝食を済ませて外出する。海璃が眠そうに「いってらっしゃい」と言うから、小さめの声で「いってきます」と言った。
散歩と言っても、決まった道は歩かない。気の向くままに歩いては、気に入った風景を写真に納める。そして、その風景を見ながらどんな物語が合うのかを考える。それが最近の趣味。

「・・・・・・今日はここだな。」

通った公園で見た景色が綺麗に思えたから、その風景を写真に納めることにした。その時、偶然通りかかった人が写真を撮ろうとしていた事に気づいたのか慌てて画面外へ逃げた。僕は申し訳なく思い、その人に聞こえるように声を出して謝罪をする。

「あ、ごめんなさい・・・！」
「あ、いえいえ～。・・・・・・？」

その人が画面外へ行ったことを確認して、写真を撮った。その撮った写真や目の前に広がる風景を見ながら、どんな物語が合うのか考え始める。周りの木々を写す綺麗な池の周りでなら、きっと告白しているところ、かな・・・？

「あの～？」
「っ！」
「何を撮っていたんですか～？」
「あ、あぁ・・・・・・この景色ですよ。」

「景色？」
「えぇ。この景色を舞台にしたら、どんな物語があるのだろうか？そう思わせれるような景色だったので。」
「物語？」
「そう。人それぞれの物語があるように、どんな景色にもそれに合う物語がある。僕はそれが好きなんです。」
「へ、へぇ～・・・・・・？」

オレンジ色のような髪色をした彼女は、のほほんとした雰囲気を醸(かも)し出しながら、僕を不思議そうに見ていた。僕からしたら、君の方が不思議感があるんだけど。・・・・・・まぁ、この頃は言えなかったけどね。
でも、この出会いが僕とその彼女の運命を変える「出逢い」だとは思わなかった。そしてこの出逢いこそが『美剣海斗(みつるぎ)』と『広町七深(ひろまちなな)』の運命を変える第一歩だったとは、この時の僕はまだ知らない・・・・・。

第3節　気づいたんだ

公園で偶然会った七深と、自分が書く小説のことを話していた。一応補足として言うと、この時の僕はまだ七深の名前を知らない。

「恋愛系が多いんですね～。」
「と言っても、妄想の中でしかないんだけどね・・・・・・。」
「妄想？」
「そう。ご察しの通り、彼女いない歴＝年齢（イコール）だから。そういう恋愛ストーリーも、自分の妄想の中の出来事だから。実際にカップルがその場所に行ったらどうなるかなんて分からないし。」
「そうなんだ・・・・・・。」

彼女の雰囲気のせいか、色々話してしまっている。

「よろしければ、私が彼女になりましょうか～？」
「・・・・・・あまりそういう事を言わない方がいいと思いますよ。自分を大事にしているように聞こえるから。」
「あはは～、そうですよね～。」

ただ、若干つかみどころがない性格なのがなんとなく分かった。

「でも、16歳にもなるのにまだ彼女いないんですね～？」
「余計なお世話です――うん？」
「？どうかしましたか？」
「僕、君に年齢伝えましたっけ？」
「えっ？・・・・・・あぁ～、なんとなくですよ～。なんとなく16歳っぽいな～って思っただけなので～。あはは・・・・・・。」

「そんな雰囲気出てます？」
「出てますよ～！それじゃあまた～！」
「あ、ちょっと待って！名前教えてくれない？」
「えっ？えっと・・・・・・な、『七深』です・・・・・・。」
「七深、さんか・・・・・・。」

慌てるように去っていった七深に、今までにない感情が生まれつつあったのは、自覚があった。家族や知り合いが去る時と彼女が去る時では気持ちがまるで違った。

両親の事情で、ある家族と接することを禁止された。その家族も芸術家だけど、方向性が違うとかで喧嘩してしまい、相手の家の同い年の子とそのお姉さんとお話できなかった。

でも、幼い時に一瞬だけ同い年の子を見たことがあった。お姉さんの方はその人の両親と一緒にいたから既に知っていた。同い年の子は男の子だった。

それからしばらくすると、お姉さんの方が私に接するようになってきた。どうやらお姉さん『海璃』さんは互いの家族の関係がどうにも嫌らしく、私が一人でいるタイミングを見計らって私に会いに来て、色々お話していた。その時に、同い年の男の子の名前が『海斗』くんだというのを知った。

「それにしても、こんなところで会うなんてね・・・・・・。」

海璃さんとは話したことあるけど、海斗くんとは話したことがなかった。だから、さっき偶然会えて嬉しかった。・・・・・・嬉しかったけど・・・・・向こうは、私のことなんて知らないよね・・・・・・？

第４節　気づいてない

「ただいま。」
「おかえり。晩御飯はもうすぐできるから――」
「いらない。」

晩御飯の時間には父親がいる。話したくないから、嘘をついてでも逃げようとする。

「・・・・・・さてと。」

自分の部屋に入り、パソコンと向き合う。小説サイトを開いて、写真に合う物語を書き綴る。自分が撮った景色、その中にどんな感じの２人が合うのか？どんなシチュエーションが似合うのか？行き詰まった時はしんどいけど、この時間は好き。

「たっだいま～！」
「ウザい。」
「うっ！さすが弟・・・・・・鋭い切れ味だよ・・・！」
「よく飽きないよね？蒼空さんにフラれてからずっとやってるけど。」
「フラれてないって！燐子（りんこ）ちゃんに負けただけだから！」
「あっそ。」

この時間は嫌い。集中している時に爆音機が帰ってきたら書こうとしていた内容が飛んでイライラするから。

「今日はどんな写真撮ってきたの？」
「・・・・・・これ。」

「う～ん？・・・・・・・あ～！あそこの公園ね！」
「そこで同い年の子と喋った。」
「凄いじゃん！あんなに『話しかけるなオーラ』を放つ海斗に話しかけるなんて・・・・・・その子、やりますな～。」
「・・・・・・言うんじゃなかった。」
「で、どんな子？」
「・・・・・・『七深』っていう女子。なんかマイペースっぽい感じだった。」
「七深？ねぇ、今『七深』って言った？」
「言ったけど・・・・・・それが何？」

突然、海璃が黙った。何か考えているような困っているような感じで、少し嫌な予感がした。

「・・・・・・ねぇ、両親と喧嘩した芸術家の家族、覚えてる？」
「確か、俺と同い年の子がいる家だろ？顔はあんまり覚えてないけど。」
「その家の子が、海斗が会った『七深』ちゃんだよ。」
「・・・・・・はっ？」

珍しく真面目に話すと思えば、真面目とは思えない事を言われた。

「・・・・・・いや、だとしたらなんで向こうは俺のことを知ってるんだ？俺は一度も会ったことないぞ？」
「確かにちゃんと会ったことはないと思う。でも、向こうは互いの両親が会った時にあんたを見ていた。私はたまに彼女にこっそり会いに行ってたんだけど、七深ちゃんはあんたを一目見た時からずっとあんたを気になっていたらしいよ？」
「・・・・・・。」

その後、勝手に彼女に会いに行っていたという海璃から七深のこと

を聞いた。苗字は『広町』で、マイペースな雰囲気を出しているのは彼女が才能があって何をやらしてもほぼ完璧にできてしまうらしく、それを隠しているそうだ。俗に言う『天才』ってやつだ。
　それよりも、僕は七深のことより七深に会いに行っていた海璃に対して驚きを覚えたんだが・・・・・・。

「そんな七深ちゃんに、全く知らないフリをしちゃったんだ～。」
「知らないんだから仕方がないでしょ・・・。」
「それで、どうするの？」
「どうするって・・・？」
「これから七深ちゃんに会った時は、知らないフリをするの？」
「・・・・・その時考える。」
「またそう言って～。」

　僕はパソコンに向き直して、小説を再び書き始めた。結局、七深のことが頭から離れず、書き終わるまでにかなり時間がかかってしまった。

第5節　ペアになった日

七深と初めて話してから1週間が過ぎた。そんな今日は散歩ではなく、コンビニにいる。少し前からこれからの資金を集めようとバイトを始めたのだ。

「いらっしゃいませー。」
「いらっしゃいませ～。」
「しゃーせー。」

・・・・・上から僕、バイトの先輩の『今井(いまい)リサ』さん、同じく先輩の『青葉(あおば)モカ』さんだ。今井さんは見た目はちょっと絡みたくないイメージだったけど、話してみるととても接しやすくて色々教わってる。青葉さんも聞けば色々教えてくれるけど、ちょっと気を抜きすぎではないかと思う・・・・・・。

「海斗くん、しばらくレジ任せていい？」
「はい、大丈夫ですよ。」
「お～、頼もしいですな～。」
「モカもそれくらいしっかりしてよ～？」
「あいあいさ～。」
「あはは・・・。」

青葉さんのテンションにはついていけない気がする。ゆったりでマイペースな青葉さんに合わせられる人が世の中にいるのだろうか？そんな事を思ってしまう。

マイペースというワードを浮かべると、ふと七深を思い出してしまう。彼女はどういう気持ちで僕に話しかけてきたのだろうか？何故

僕のことを気になっていたのだろうか?そんな事を考えてしまうが、お客さんが来る気配がしたので、そんな考えは一度忘れて仕事をすることにした。

「いらっしゃいませー。どうぞー。」
「お願いしま・・・・・す・・・・・・・。」
「お預かりしますね。」

お客さんの言葉が途切れ途切れだったけど、それを考えるよりもお客さんに迷惑をかけてはいけないと思い、素早く商品をレジに通す。ってか、この人どんだけ食玩を買うのさ?1ケース買ってないか?

「・・・・・・合計で６８２８円です。」
「・・・・・・・。」
「・・・・・・・お客さ・・・・・・・ま・・・・・・・?」

コンビニでその額を見るのは初めてでちょっと戸惑っているが、何も反応がないお客さんが気になって見ると、それ以上に戸惑うことがあった。それは・・・・・・。

「七深・・・・・・さん・・・・・・・?」
「どうして・・・・・・・海斗くんが・・・・・・・?」

お客さんが、ちょいちょい僕の頭をよぎる七深だったからだ。驚いた理由は対応しているお客さんが七深だったってのもあるけど、そんな七深が７０００円も使って食玩を大人買いしてることに驚いてしまった。

「海斗く～ん?大丈夫・・・・・・・って、七深じゃん。」
「あ、リサ先輩。」

「何～？もしかして2人、知り合いだったの？」
「えっ？いや・・・・・・・。」
「まぁ・・・・・・知り合いっちゃ知り合いですね。」
「っ！」
「そっか～。ちょうど休憩時間になりそうだから、ちょっと話してくる？」
「いや、働きますよ！」
「そぉ？それじゃあ、そのレジ終わったら休憩ね♪」
「あ、はい・・・。」

今井さんに言われるがままに、七深の分のレジを済ませたら休憩に入った。七深と2人でコンビニの前でジュースを飲みながら横に並ぶ。

「・・・・・・1週間ぶり、ですね。」
「そう、だね・・・。」
「・・・・・・・。」
「・・・・・・・。」

会話が続かない。この前、七深のことを知らなければ何事もなく会話出来たのだろう。・・・・・・いや、知っていなくても出来ていたか危ういけど。
こんな重たい空気は僕自身が嫌だったから、思い切って踏み込んでみた。

「・・・・・七深さんって、美剣家（うちけ）と仲が悪い広町家の娘さんだったんだね。」
「っ！ど、どうしてそれを・・・・・・？」
「知ったのは半分偶然だよ。僕の姉の海璃が、僕の口から『七深』って名前を聞いた途端に色々教えてくれた。」
「そうなんですね・・・・・・。」

「君は知ってたんでしょ？僕が仲の悪い相手の家の息子だって？」
「・・・・・・・。」

無言でも、彼女は頷いた。思いつめて来る人がいないコンビニで、僕たちの周りだけがとても重たい雰囲気を作り出していた。

「もしかして、何か言われましたか・・・・・・？」
「両親には話してないよ。話したくないし・・・・・・。」
「えっ・・・？」
「だって会話すると・・・・・・『写真家になれ』って言われるだけだし・・・・・・・。」
「・・・・・・それだけ？」
「それを毎日言われてみなよ！嫌になって話す気無くなるから！」
「・・・・・・ふふっ！」
「・・・・・・うん？何かおかしいこと言った？」
「いえ・・・！海璃さんかた聞いてた通りだな～って。」
「そう？ってか、海璃からどんなこと聞かされてるの？」
「あ、気になります～？」
「ちょっとはね。あの人なら色んなことを話しそうだから・・・・・・。」
「あぁ～、確かに・・・・・・・。」
「・・・・・・あ。あと、敬語は無しにしようよ。同い年なんだし。」
「う、うん。いいよ。でも・・・・・・大丈夫かな・・・？」
「親同士のこと？」
「うん・・・・・・・。」
「・・・・・・親は親、子供は子供。親はどんなイメージを相手に持っていようが、僕たちには関係ない。僕たちは僕たちらしく接していこうよ。何かあったら僕が何とかする。だから、ね？」
「・・・・・・うん、分かった。なんか、海斗くんにそう言われると安心するな～。」
「そう？」
「うん！」

僕たちは互いの連絡先を交換した。そして、親には内緒の友好関係を築いた。正直、この関係がずっと続くとは思っていない。でも、こんなにも魅かれる七深との関係を簡単に断ち切られたくない。そう思い、バイトに戻った。

第6節　不慣れな人付き合い

七深と連絡先を交換したその夜、いつものように海璃が部屋に侵入してきた。

「どぉ、進捗は？」
「まぁまぁかな。・・・・・・って、また勝手に・・・。」
「いい加減慣れてよ。それに、私が聞いたのは小説のことじゃなくて七深ちゃんとのことなんだけど？」
「だったら『進捗』なんて紛らわしい言い方するなよ。」
「それでどうなの、七深ちゃんとは？」
「そこまで気になる？」
「うん！」キラキラ

呆れてため息すら出なかった僕は、七深とのことを素直に話した。途中ニヤニヤしてた海璃だけど、意外と真剣に聞いていた。

「・・・・・・って感じ。」
「そう。良かった・・・。」
「うん？」
「う、ううん！なんでもない～！そうと決まれば、これからは七深ちゃんとたくさんお話しないとね～？」
「僕たちと七深の家の関係、忘れてないよね？下手に派手に動けば互いの親がどんなバカ喧嘩するか分かんないんだから・・・・・・。」
「なんのために連絡先を交換したのよ～？」
「・・・・・・あ、そういう事か。って、誘えってこと？」
「当ったり前よ～！」
「あぁ・・・。」

シフト的に大丈夫かな・・・？頭をよぎった心配事はそれだった。他にも考えることはあったのに、それが先に浮かんでしまった。それだけ、七深と会うことが楽しみだった・・・・・・のかな・・・？

翌日、バイトが入っていたから連絡しなかった。・・・・・・いや、ヘタレ過ぎて出来なかったのが一番の答えなのだろうが・・・・・・。

「しゃーせー。」
「いらっしゃいませ。・・・・・・青葉さん、いい加減真面目に挨拶されては？」
「いやいや～、これがモカちゃんの真面目な挨拶なんだよ～。」

その口調で言われて信じられる人間がいるのだろうか？いや、いないな。幼馴染がいるとは言っていたけど、その人たちは扱い慣れているんだろうな・・・・・・。

「あれ？七深ちんだ～。」
「えっ？」
「ど、どうも～。」
「ど、どうも・・・・・・。」
「・・・・・・あ、海斗くん良かったら休憩入る～？」
「えっ!?まだ休憩時間じゃないですよ！」
「その辺は気にしな～い。ごゆっくり～。」
「ちょっ！・・・・・・あ、あのさ・・・。」
「は、はい・・・・・・。」
「そ、外で話さない？」

この時の僕はとても分かりやすいほどに挙動不審だっただろう。急に七深が目の前に現れ、急に予想してなかった休憩に行かされて、どうしていいか分からなかった。分からなかったのにやった行動が『外で2人きりで話す』って、キザか!?

で、結局コンビニの外で2人共片手にジュースを持って会話するのであった。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

いや、『会話』はしてなかった。終始無言の時間が続いた。

「・・・・・・・そういえば、七深は色々出来る天才なんでしょ?」

「っ!」

「えっ?・・・・・・・・あ、この話はマズかった?」

「・・・・・・・したく、なかった。」

「あ・・・・・・・ごめん。」

「だって、バレたらみんな離れてくから・・・・・・話したくなかった・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「っ・・・・・・・・。」

「僕は気にしないよ。」

「えっ・・・・?」

「だって、有名アーティストの娘さんなんだから、何かずば抜けていることぐらい普通でしょ?それに比べて、僕は逃げてばっかだからそういう才能がないんだよね・・・・・・・。」

「・・・・・・ねぇ。」

「うん?」

「もしも・・・・・・もしも私が、バイオリン用の曲をバンド用にアレンジしたら、変かな・・・?」

「ううん、変じゃないよ。普通だと思う。」
「すらすら触ったことない楽器を弾けるのは？」
「普通でしょ？」
「あえて絵を下手な感じで書くのも？」
「・・・・・・もしかして、全部七深が実際にやったの？」
「・・・・・・。」コクン

ここまで来ると『天才』とは何なのかを考えさせられるよね？

「・・・・・・じゃあ、普通っぽいことしてみる？」
「えっ・・・・・・普通っぽいことって？」
「その・・・・・・一緒に出掛ける、とか・・・・・・？」

この流れで誘えた僕は『天才』というより『めっちゃキザ』だと思う。今なんか絶対に誘えないもん・・・・・・。

第7節　独り言

私は1人でいる時、口のにやけが止まらなかったと思う。形がどうであれ、海斗くんから誘ってくれたことが嬉しかった。頑張ってモニカのみんなの前ではいつも通りにしてたけど、出かける前日となった今は、嬉しいのと緊張が同時に押し寄せてきて、どうにかなってしまいそうだった。

「おはよ～。・・・・・・ちょっと普通すぎるかな？遅れちゃってごめんね～。・・・・・・待ち合わせ時間にはいる気がするしな・・・。」

傍から見たらただの変な人だと思う。壁に向かって言ってる自分自身がそう言うんだから、絶対変な人だと思う。どれだけ壁打ちしたら、正解が見えるのだろうか・・・？

「はぁ・・・。」

考えても答えは見つからない。明日着ていく服は決まったから、会った時の言葉は当日考えることにして私は眠ることにした。きっと、明日にはその答えが見つかってると信じて・・・・・・。

七深を誘ってから早くも1週間が経った。互いの予定を考えて来週の土曜日になったけど、心の方はちょっと落ち着かない。そもそも、女の子と一緒に出掛けたのなんて一度もない。・・・・・・あ、海

璃とは何回かあったわ。かなり昔に。でも、その時の記憶なんてあまり覚えてない。

「お、お待たせ～・・・・・・・。」
「いや、そんなに待ってない、よ・・・・・・・。」

七深の私服は見たことあったけど、その時とは少し違って全身白のワンピースに黒色のベルトを身に着けた少し清楚なイメージだった。

「へ、変かな～・・・・・・・？」
「い、いや・・・・・・変じゃないよ。普通に可愛いよ。」
「そ、そう～？なら良かった～。」
「それじゃ、行こっか？」
「うん。」

僕たちは気ままに散歩をするかのように歩き始めた。

「ねぇ、ななみちゃんたちは？」
「えっと・・・・・・・あれ？いない・・・・。」
「えっ!?・・・・・・・あ、あそこ！」
「もう歩き始めてる！」
「行くよ！シロ、ふーすけ！」
「うん！」
「えぇ・・・？」

始まりは昨日の夜、突然透子ちゃんから連絡が来た。内容は、『最近ななみの様子がおかしい。今度の土曜に出掛けるとか呟いてたから

追いかけてみよう！』だった。この内容をななみちゃん以外のモニカ全員に送ったらしく、言うまでもないけどるいさんには『断る』という既読スルーだったんだって。でも、つくしちゃんは了承したみたいで、私はやや強制だった・・・。

「それより、ななみちゃんの隣にいる人は誰だろう？」
「分かんね。もしかして、ななみの彼氏だったりして？」
「そ、そうかな・・・？ってか、こんなのバレたらななみちゃん怒るよ？帰ろうよ・・・。」
「何言ってんのシロ！最近ななみの様子がおかしかったのは知ってるでしょ？」
「それとこのお出かけ、関係あるかな・・・？」
「あるって！」
「ましろちゃんだって、尊くんとデートの約束するとそわそわしたりしてるでしょ？」
「そ、それは言わないで～！」
「ってことで、モニカ2人目のリア充になるか、あたしたちで確かめるよ！」
「おぉ～！」

なんでつくしちゃんまでノリノリなんだろう・・・・・・？

第８節　気づいたんだ

透子ちゃんとつくしちゃんと私の３人でななみちゃんを追いかけてると、色んなところへ寄り道しながらどこかへ向かっているようだった。

「あの２人って、ほんとうに付き合ってるのかな～？」
「うーん、あたしとしては付き合ってるようには見えないな～。」
「なんか、互いに遠慮している感じだよね？」
「タケルと初めて会った頃のシロみたいでな？」
「そ、それは言わないでよ・・・・・・！」

何か言えば必ずと言っていいほどに私がからかわれる。もう、お家(うち)に帰りたい・・・。

「あ、あのカフェに入っていったよ。」
「あたしらも行こ！ついでにちょっと休憩しよ！」
「『休憩』が本音なんじゃ・・・？」
『ななみちゃんを見逃さない』という程で私たちも休憩することになった。

さっきからずっと気になってる、僕たちの後をずっとつけている３人組がいることを。意外と鋭い（と思う）七深は気付いてるのだろう

か？

「すみませ～ん。これくださ～い。」

全く気にしてない感じで注文してるし・・・。もしかして、本当に気付いてないのか？

「お客様？」

「あ、はい。えっと・・・・・・じゃあ、これを。」

「かしこまりました。」

「海斗くんって、意外と甘党？」

「ううん、コーヒーも飲めるよ。でも、ここに来たら必ずというほどこれを頼むんだ。」

「そうなんだ・・・・・・。」

七深が頼んだのはアイスコーヒーで、僕が頼んだのは『チョコリスタ』というドリンク。これに『エスプレッソショット』を追加して飲むのが一番美味しい飲み方だと僕は思ってる。

「ところで～、もしかして気付いてる～？」

「えっ、何を？」

もしかしたら、ずっと後をつけている3人組のことを言っているのかと思った。でも、もしも違ったらという考えがあったから、あえて知らないふりをした。

すると、七深は唐突にスマホを取り出して文字を打ち始めた。誰かにメールするのだろうかと思ったら、おもむろにスマホの画面を僕に見せてきた。

『私たちの後をつけてる3人のこと、気付いてないの？』

見せてきた画面にはメールアプリを起動してその言葉が書かれていた。僕もスマホを取り出して、メールアプリを起こして文字を打って七深に見せた。

『いつから気付いていたの？』
『合流した時ぐらいかな？』

この文を見て少しだけ驚いた。僕が気付いたのは2軒目の店を出た後ぐらいだった。でも、それより前に七深は気付いていた。天才ってそんなもんなのか？

『でも、気付いてないふりして。私の友達だから。』

文字を打とうとしたけど、打ち終わる前に七深が先に文字を打ち終えて見せてきた。これはこれで驚いたけど・・・・・・。まさかの七深の友達が僕たちの後をつけていたのか・・・。

『ちなみに、どういう友達なの？』
『バンド仲間って言うのかな？Ｍｏｒｆｏｎｉｃａってバンド名で一緒にバンドやってるんだ。』
『七深、バンドやってるんだ。楽器は何やってるの？』
『私はベースだよ。』
『ベース？なんで？』
『面白そうだったから。それに、しろちゃんたちはもう担当決まってたし。』

バンドの担当ってそんな感じで決めるものなのか？バンドなんて全く関係ない世界だったから、全然知識がない・・・。

「お待たせしました。アイスコーヒーとチョコリスタでございます。」
「は～い。」

「ありがとうございます。」
「では、ごゆっくり。」

頼んだ物が届いて、僕たちは一口飲む。チョコの甘さの中に、エスプレッソショットの苦みが少し混ざっていて美味しい。ただ、これが夏限定っていうのがちょっと残念な部分だ・・・。

「そっちも美味しそうだな～。」
「飲んでみる？」
「えっ、いいの・・・？」
「うん、気に入るかどうか分からないけど、どうぞ。」
「ありがとう。・・・・・・・あ。」
「うん？」
「ちょっと待って・・・・・・・。」

飲もうとした時、突然七深が席を外した。すぐに帰ってきたけど、手には新しいストローがあった。

「うん？・・・・・・・あ。ごめん・・・。」
「ううん、気にしないで・・・！いただきま～す。」

年頃の女の子に男が口をつけたストローから飲めっていうのは酷かったな・・・。場合によってはセクハラで訴えられるだろうし・・・。

「・・・・・・うん、甘い・・・。でも、美味しいかも・・・。」
「そう？それなら良かった。」

それから2人でのんびりくつろいだ後、店を後にした。出る時に他のお客さんのテーブルの上をちらっと見たけど、苦めのコーヒーを頼んでる人がたくさんいたことに一瞬疑問を覚えたけど、あまり気にしないことにした。

甘すぎた・・・。普段あまり飲まないコーヒーが普通に飲めるぐらい甘かった・・・。

「今日は一段とコーヒーが美味い！」
「私も、しばらく甘いのはいらないかも・・・。」
「私も・・・。」

恋人でもないのにあれだけ甘い雰囲気を作れるって、ほんとうにあの2人はどういう関係なんだろう・・・？

「シロもタケルとあれぐらい甘々な雰囲気出してくれよ～？」
「だから、なんで私に言うの・・・・・・!?」

もう、ほんとに泣きそう。今だけは透子ちゃんから逃げたい・・・。

第9節　他人の事言えない

「そういえば、さっきななみちゃんたちはなんでスマホを見せあってたんだろう？」
「なんか面白い動画でも見つけたとか？」
「そんな透子ちゃんじゃないんだから～。」
「ふーすけ、言うね・・・！」

　別の場所に向かうななみちゃんたちを尾行する私たち。ななみちゃんたちの会話が聞こえない距離にいるから、どんな会話をしているのか分からないから、２人がどういう関係なのか分からない。

「やっぱ、あたしからしたらあの２人、恋人だと思うんだよな～？」
「でも、恋人だとしたらもうちょっと距離が近かったりするよね？」
「私も、つくしちゃんと同じ・・・・・・。」
「シロまで～!?もぉ～我慢の限界！直接聞いてみよ！」
「ダメだよ、透子ちゃん！そもそも「２人を追いかけてみよう」なんて言ったの、透子ちゃんなんだよ！」
「それに、ななみちゃんたちの邪魔をしちゃダメだよ・・・・・・！」

　気付かれないように尾行する前に、暴れる透子ちゃんを抑える方で力を使ってしまう私たち。もう休みたくなった・・・・・・。

　僕たちの後をつけてくる３人組、一体何をしているのだろうか・・・

？

「それより、どこに向かってるの～？」
「学生なら普通に何度も通う場所。」
「普通～！」

・・・・・やっぱり、七深は一癖ある娘だな。「普通」という言葉に過敏に反応する。まぁ、あの家に居れば普通の生活は送れないよな・・・。

「それでそれで、どこなの～？」
「ここだよ。」
「？ここって・・・・・・・？」
「ゲームセンター。『ゲーセン』って言った方が分かりやすいかな？」
「ゲーセン・・・・・・・初めて来たよ・・・・・・・。」
「そうなんだ。・・・・・と言っても、僕もそんなに来てないけどね。」
「そうなの？」
「最後に来たのは・・・・・・・中２の時に海璃と来た時かな？」
「海璃さんと来たんだ・・・・・・・。」
「でも、振り回されっぱなしだったから楽しめなかったけどね。」
「あはは・・・。」
「ってことで、今回はちゃんと七深を楽しませながら楽しむことにするよ。」
「・・・！うん！」

よくよく考えてみれば、僕も海璃と一緒に行った１回きりだから、他人（ひと）の事言えないな・・・。
ゲームセンターに入ると、まず僕たちを迎えてくれたのはＵＦＯキャッチャー。お菓子もあればぬいぐるみもあり、ヲタク向けともいえる人形まで景品として置いてある。

「おぉ～！たくさんある～！」
「ま、ゲーセンが初めてならＵＦＯキャッチャーも初めてだよね・・・。」
「お菓子まで置いてある～。」
「お金を入れて、あの中の物を穴の中に落とせばゲットってゲーム。ほら、あんな感じに。」

他のＵＦＯキャッチャーでプレイしている人たちを見つけたから、例えとしてそれを見せる。ちょうどいいことに、成功と失敗の両方を見せることが出来た。

「やってみる？」
「うん！えっとね・・・・・・あれがいい～！」
「あれ？・・・・・・って、デカ・・・。」

七深が指さしたのは、『ごろねこ』とかいう大きいねこのぬいぐるみ？クッション？そんなの。海璃と来た時はお菓子だったけど、あれは初めてだ・・・。

「・・・・・・ま、まぁ、やってみるのはいいことだと思うよ・・・。」
「行っくよ～。」
「ってもうやってるし・・・。」

ＵＦＯキャッチャー完全初心者の七深のプレイ。結果は言うまでもなく失敗に終わった。こんな大きいクッションなんて取れる人いるのか・・・？

「あぁ・・・。」
「まぁ最初はそんな感じだって。・・・・・・あ、コツが書いてある。」
「コツ？・・・・・・ほんとだ・・・。」

取らせる気があるのかないのか分からないけど、『取り方のコツ』み

たいなのが書かれた紙が機体に貼り付けてあった。それを見た七深は・・・・・・・。

「・・・・・・よし。」

再びＵＦＯキャッチャーに投資した。そんなに欲しいんですか・・・？

「・・・・・・・。」

「・・・・・・・。」

たかがゲームなのに、僕と七深に緊張感が走る。紙に書かれた通りにアームを景品に引っかけて、景品は・・・・・・

穴の中に落ちた。

「・・・・・・取れた。」

「・・・・・・？でしょ・・・・？」

「取れたよ、海斗くん！」

「う、うん・・・。」

この時、僕は改めて七深が天才だってことを実感した。１回目はノーヒントで失敗、２回目はヒントを見て成功。これぐらいのクッションを2回で取れたとなると、何千円と投資して苦労の末にゲットしてきた人たち・ゲットしてない人たちが可哀想に思えてくる・・・。

「君の名前は『にょちお』だよ～。」

「ちょっと待って。その名前はマズい。」

第１０節　終わるＷｅｅｋｅｎｄ

それから僕たちはゲームセンターを楽しんだ。レーシングゲームで対決したり、エアホッケーをしたりした。それに少しメダルゲームを遊んだ。中でもメダルを使ったシューティングゲームが一番盛り上がった・・・・・・気がする。

でも、一番時間かけて遊んだのは『プリクラ』、かな・・・・・？『時間かけて遊んだ』は語弊があるかな？互いにプリクラが初めてだったから、結構苦戦しました・・・。

「ね、ねぇ・・・・・・これ、やってみない？」
「これ？これって・・・・・・プリクラ？」
「うん・・・。」
「あぁ・・・・・・やって、みよっか・・・？」

七深がやってみたいって言うからプリクラに入ってみたけど・・・・・・。

「これ、何・・・？どれをどう操作したらいいの・・・？」
「か、海斗くん・・・・・？」
「ちょ、ちょっと待ってね・・・！」

・・・・・なんて事をしてました・・・。どっからどう見ても普通のおじさんが間違えてプリクラに入ってしまって帰れなくなってしまったみたいな展開になってました・・・。

「～♪」
「・・・・・そんなプリクラでいいの？」

「うん、これぐらいが普通だと思うから。」

帰り道だけど、写り映えの悪そうな写真を見てちょっと嬉しそうにしている七深だった。僕はその写真を見る度に若干申し訳ないと思ってしまう。

「海斗。」
「うん？・・・・・・・親父・・・・。」
「そちらの子は・・・・・・・・まさか、あの家の娘ではないのか？」
「か、海斗くん・・・・・・・・。」

楽しい時間ってのは一瞬で終わるようだ。面倒くさい親父とばったり遭ってしまった・・・。七深はとても不安そうにしてるけど、僕は覚悟を決めて親父に言いたいことを言うことにした。

「・・・・・・悪いけど、俺たちと親父たちは違う。」
「ふざけるな！」
「・・・・・・七深、ごめん。今日はこの辺にしよっか？さよなら。」
「えっ、ちょっと・・・・！」
「海斗、待ちなさい！」
「・・・・・・七深、本当にごめん。」

僕は七深と雑な別れをして、親父を置いて家に帰る。

「はぁ～、楽しかった～！」
「って、そんな事言ってる場合じゃないよ！」
「２人とも、なんか変な感じだったね。」

「あの人、男性のお父さんなのかな・・・？」
「そうなんじゃね？」
「透子ちゃん、もう完全に飽きてるよね・・・。」

でも、ななみちゃんの雰囲気からしていい感じのさよならの仕方じゃないよね・・・？悪い雰囲気な気がするよね・・・？

「・・・・・で、結局ななみちゃんと一緒にいた人って誰だろう？」
「わかんね。」
「つくしちゃん、透子ちゃんに聞かない方がいいと思うよ・・・。」

ななみちゃん、ちょっと心配だな・・・。

第11節　そばにいて

あれから海斗くんとは一度も会ってない。連絡さえも・・・・・。メッセージアプリでメッセージを送っても数日経って既読が付くだけで返信は返ってこない。あれが完全の別れではないのは分かったけど、返信が来ないのは寂しい。

「・・・・・はぁ。しろちゃんも、こんな感じの時があったのかな・・・・・？」

既読しか返ってこないトーク画面で『会いたい』と送ろうとしたけど、この流れだと数日したら既読が付くだけだろうから送るのは辞めた。前にしろちゃんが尊くんのことで悩んでいた時もこんな感じだったのかなと思ってしまった。私の場合は海斗くんに恋してないのに・・・・・恋して・・・・・恋・・・・・してない、はず・・・。

でも、やっぱり海斗くんと会えないのがよっぽど辛いのが分かってしまう。夢の中に海斗くんが出てきてしまった。夢の中で出会えたって、現実は何も変わりはしないのに・・・。

「それって、やっぱななみはその人に恋してんじゃねーの？」
「えっ・・・・・・そ、そうなのかな・・・・・・？」
「そーだって！リサさんやひまりさんから聞いたから！」
「それは参考にならないでしょ？」
「ちょっとルイ～!?」
「でも、るいさんの言うことは分かるな・・・。」
「じゃあシロが判断しろよ～！」

「えっ、いや、ちょっと・・・・・・・。」
「あははは・・・・・・。」

やっぱり、モニカといるとちょっとでも海斗くんとのことを一瞬ぐらいは忘れられた。でも、自分の手に残った、プリクラの時に握った彼の手の感触をふと思い出してしまうけど、決して私たちが報われることはないんだと思ってしまう・・・。

「はぁ・・・。ほんとうに恋してるのかな・・・・・・?」

もしも恋をしているのなら、それは絶対に叶わない恋になるのは分かっている。互いの家同士、仲がとても悪いから互いの両親は私たちが結ばれることはない。そう思ってしまうから、その部分だけは光が消えてしまったみたい。何か虚しさを感じてしまったよう・・・・・。

「七深。」
「っ!」

ふと聞こえてきたのは、少し前に聞いてた声。
夢の中で何度も聞いた声。
私を普通から離れさせた悩みの原因の人の声。
同じ境遇にいるのにその運命(さだめ)を絶ちきろうとしている人の声。
私が一番逢いたくて、今は会いたくない人の声。

「・・・・・・おやおや~、海斗くんじゃ~ん。久しぶり~。」
「・・・・・・うん、久しぶり。」

私は今まで通りのテンションで返した。溢れ出る感情を隠して・・・・・・。

久しぶりに会った七深は、変わらなかった。いや、変わらない姿を見せているのだろう。声をかけた時、彼女は辛そうな顔をしていたからだ。僕は七深を連れて近くの公園へ行き、ベンチに座った。

「はい、これ。」
「ありがと～。」

近くの自販機で買った缶コーヒーを1缶、彼女に渡した。「ぷはー」と気の緩むようなことを言っているけど、僕は無理しているようにしか見えなかった。

「そういえば、最近なんかつれないね～？」
「えっ？」
「だって、私の送ったメッセージ全部既読スルーしてたでしょ？どうかしちゃったのかと思ったよ～。」
「・・・・・・まぁ、色々あってね。七深にも関係あると思うけど。」
「私にも？」

普段通りに会話されるおかげで、七深の心が見れない。でも、それでも僕は重要な話をする。

「・・・・・・七深、一緒に家を出よう。出て、二人で過ごさない？」
「そ、それって・・・・・・告白・・・？」
「そう捉えてもいい。互いに窮屈（きゅうくつ）な家に居るんだ。僕たちは僕たちらしい、新しい生活を送りたい。」
「・・・・・・。」
「・・・・・・別に強制しているわけじゃない。両親の下を離れるんだから、それなりの覚悟が必要だから。」

「ちょっと、考えさせて・・・・・・・。」

そう言って七深は俯いた。しばらくすると、七深は口を開いた。

「・・・・・・出来れば、それはしたくない・・・。」
「・・・・・・・。」
「今、やっと気付いたの。私は海斗くんに惹かれていることに。でも、実の家族と離れるのは嫌だよ・・・。」
「・・・・・・そっか。変なこと言ってごめん。」
「じゃあ、一つお願いさせて。」
「いいよ。」
「少し、そばにいて・・・・・・・。」
「・・・・・・どうぞ。」

僕は彼女の肩を抱き寄せた。彼女は僕の肩に頭を乗せてきた。無意識のうちに作ってしまった彼女の孤独を埋めるために・・・・・・。

「や～～～～っとくっついたわね～！」
「えっ？・・・・・・うわぁ!?お、お母さん!?・・・・・・・えっ???」

１０秒ぐらいしたら、僕の母が突然話しかけてきた。そして、横には（七深の反応からして）七深のお母さんもいた。

「ごめんね～。お父さんたちには内緒で、あなたたちにはくっついてほしいと思って見守っていたのよ～。」
「はっ？」
「お宅の息子さん、素敵なプロポーズをするのね～？『一緒に住もう』

だなんて～？」ニヤニヤ
「そちらの娘さんだって、さりげなく『好きです』アピールするなんて、なかなかの実力ですよ～。」
「お、お母さん・・・・・・？」
「親父たちの意見は・・・・・・？」
「あぁ～！あんなアホ共――」
「反対しようもんなら――」
「「真っ先に捻り潰してあげるわよ？」」
「「あ、あはは・・・・・・。」」

翌日、僕たちは親父たちから謝罪を受け、堂々と家族間交流が出来るようになった。そして、僕と七深は互いの気持ちを偶然（だと思いたいけど）知ってしまい、正式に付き合うことになった。
どっちの母も、怖かった・・・。

第１２節　心など全焼したっていい

今日は学校もバイトもお休み。なんか気分転換がしたくなって河原にレジャーシートを敷いて寝転がっている。

「ふわぁ～・・・・・・・。」

お日柄も良く、絶好の昼寝日和だから、睡魔に襲われてきた。家のことで悩むことがなくなったから、ずいぶん肩の荷物が軽くなった。天気と気持ちのおかげで眠りにつこうとしていた。

「こんなところでお昼寝ですか～？」

「・・・・・・なんだ、七深か。」

「『七深か』じゃないですよ～。あなたの恋人が来てるのに何を寝ようとしているのかな～？」

「眠気にはあまり勝てない人間なのでねー。」

「ふ～ん。」

僕の顔を覗いてきたのは、あの一件の後に互いの気持ちを知り恋人関係になった広町七深だった。頭上から立ったまま僕を覗いてくる七深の顔はニヤニヤしていた。ただ、僕としてはここで一つ問題が起きる。

「・・・・・・ねぇ七深。一ついい？」

「何～？」

「僕は悪くないと思うんだけどさ・・・・・・見えるよ？」

「えっ？・・・・・・っ！」／／／

その一言で察してくれたのか、ワンピースの裾(すそ)を押さえながら七深(七深の服)は少し下がってくれた。

「み、見た・・・・・・・？」／／／

「『見た』とは言ってないよ。『見えるよ』と言っただけ。」

「あっ・・・・・・・そ、そっか～。」

「そうそう。早とちりもそこそこにしなよー。」

正直、七深のワンピースの中を見てしまった。まぁ・・・・・・・俗に言う『下着』ってものをね。でも、正直に『見た』って言ったら絶対に怒ると思った。だから、保険として先に『見える』と言っておいた。保険が上手く効いてくれて良かったよ・・・。

「見たとしても怒らないのに・・・・・・・。」

「えっ？何か言った？」

「なんでもありませ～ん。」

「なら、いいけど――って、ちょっと何？」

「横に座らせて。」

「あ、はい。すみません。」

ちょっと声色が変わった七深は僕を少しどかしてレジャーシートに座った。

「・・・・・・ちなみに、これって普通のこと～？」

「うーん・・・・・・普通ではないかな～？」

「そ、そうなんだ・・・・・・。」

「だって、普通高校生がこんなとこで昼寝なんてしないでしょ？」

「それも・・・・・・そうだね。」

そう言いながら、七深は仰向けになった。ボソッと何か言ったり、声色を変えたりと、今日の七深はちょっと何考えているのか分からな

い。・・・・・・・あ、前からそんな感じだったっけ？

「ねぇ、海斗くん。」
「はい？」
「私たちって・・・・・・・こ、恋人、なんだよね・・・？」
「まぁ・・・・・・・互いの認識があっていれば。」
「だよね～。」
「う、うん・・・。」
「・・・・・・あ、あのね！私、色々覚悟はしているんだよ・・・！」
／／／
「うん？う、うん・・・・・・。うん!?」

顔を赤くして何かモジモジしながら言ってくる七深に、僕はどういう理由で言ってきたのか理解してしまってちょっと動悸が・・・・・。

「な、七深さん・・・!?」
「っ・・・！」／／／
「はぁ・・・。七深、ひとまず落ち着こう。まず、ここは外だよ。そしてね、どこでそんな情報を手に入れたのか分からないけど、僕が一応男だからってすぐさまそういうのするわけではないんですよ。」
「えっ、そうなの・・・？」
「男は基本狼だけど、全員が全員狼ではないんですよ。」
「そうなんだね。・・・・・・じゃあ、全く興味ないの？」
「ねぇ、なんでそんな極端な考えしかないの？全く興味がないわけじゃないから。」
「へ、へぇ・・・・・・。」

お嬢様学校にいる人間はそれを知る機会がかなり少ないとしても、知ったら知ったでなんでこんなにふざけた考えに走っちゃうんだろうか・・・？

「・・・・・悪いけど、僕はかなりマイペースだから、どうしてもって言うなら僕のことを急かしてくれ。」
「・・・・・・ふふっ。」
「なんで笑うの？」
「ちょっと変だな～って思って・・・。」
「そう？」

僕の考え・・・・・というか性格が分かってくれたのか、いつものテンションに戻った。このペースでのんびり歩いていこうと思っている。でも、七深相手だと色々苦労しそうだけど、まぁのんきに向き合っていこうと思っている。

「じゃ、おやすみ～。」
「海斗く～ん？」

まぁ、分かりやすく言えば七深相手なら心さえも全焼したってもいいと・・・・・今は思ってる。